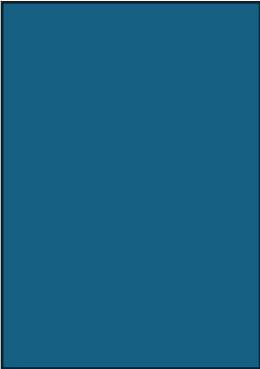


こんなものを読んできた(34)

～蓑輪 諒「うつろ屋軍師」～

校長・鈴木 健

前回は書いたのですが、ラノベの「転生もの」や「悪女もの」が煮詰まった状態のように、時代小説や歴史小説もかなり煮詰まったジャンルです。たとえば今、戦国時代を扱った小説を書くとして、織田信長、豊臣秀吉、徳川家康などメジャーな武将を主人公とした場合、よほど新しい視点や解釈を取り入れなければ、読者に興味を持ってもらえないでしょう。そうでなければ、これまで小説の主人公になっていなかった、でも興味深い人物を探し出して「こんな人もいました」という話を書くしかありません。今回取り上げる「うつろ屋軍師」は、この後の方のタイプの作品です。



主人公の江口三郎右衛門正吉（三右）は、織田信長の家老丹羽長秀の家来です。壮大な戦略を考え出す才能がありますが、彼の戦略は丹羽家の現状や実力からは実現しそうでないものばかりで、家中では「空論（うつろ）屋」と呼ばれています。しかし頭でっかちな男なのかということではなく、他人から見たら無謀と思える（三右の頭の中では成功の確率がある）攻撃を敢行して、手柄を立てる度胸の良さも持っています。

織田信長が本能寺の変で死んだ後の羽柴（豊臣）秀吉と柴田勝家の争いの中で、三右の主、丹羽長秀は一貫して秀吉を支持します。その結果、秀吉が天下を取った後、丹羽家は広大な領地を与えられ厚遇されます。しかし織田家の足軽から成り上がった秀吉にとって、昔、自分よりはるかに格上であった丹羽家は目障りな存在です。長秀が死に次の長重の代になると、秀吉は丹羽家から領地も人材もどんどん奪っていき、丹羽家は存亡の危機に陥ります。三右は何とか丹羽家を守ろうとしますが…。

この小説の主人公、三右（江口三郎右衛門正吉）は実在の人物です。日本は歴史資料が豊富に残っている国なので、三右のように有名ではないけれど記録に名前が残っている人がたくさんいます。先日、私はちょっと気になることがあり、江戸時代の歴代将軍の言行を記録した「徳川実記」や旗本（徳川家の家来）各家の系譜・略歴を記録した「寛政重修家譜」を調べていました。何百何千もある旗本の家がそれぞれ自分の家の物語を持っていて、とても面白く読めました。こういったものを見ると、歴史というのは一部の偉人だけが作ったのではなく、たくさんの人々の働きで作られたことがわかります。また記録に残っていない無数の人たちも、しっかりそれぞれの時代を生きていたはずで、私たちは全員、そういう御先祖の子孫であるわけです。

主人公の三右と丹羽家が、天下人の秀吉や家康の政略に振り回されて苦しんだように、私たちのほとんどは政治や経済の大きな流れの前では小さな存在です。しかし、それらが自分を押しつぶそうとした時、くじけずに抗うことには意味がある。決して無力ではない、そう思わせてくれるような作品です。